

二〇一六年度

A

国語 (1)

【注意】答えはすべて解答用紙に書きなさい。

受験番号

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学三年生の「僕」は、村の伝統行事「狐がえり」の地区リーダーとなるが、地区には小学五年生のミヤコと二年生のサナオしかいない。そこで東京から引っ越してきた中学三年生の三崎花子を誘うが、何度説得しても断られる。物を贈って喜ばせれば、三崎も仲間に入ってくれるに違いないと考えた「僕」たち三人は、川で鮎を採って贈るが、都会育ちの三崎は生の鮎を気味悪がって受けとらない。三崎の反応にサナオは泣き出し、ミヤコは怒り、「僕」は途方に暮れてしまう。しかし、やがて「僕」は三崎の立場も考えるようになる。そして三崎は嫌な思いをしていたに違いないと思うと、居ても立ってもいらなくなり、三崎の家へと向かった。

① 夏は夜。去年国語で習った「枕草子」で、昔の女の人が言

ったように、僕もそう思う。昼間はあんなに暑かったのに、日がかげるとひんやりする。だけど、他の季節とは違い、真っ暗になっても、日のぬくもりが木々や道にも残っていて、まだ外にいても大丈夫という解放感がある。三崎の家までの道も、昼間に歩くより気持ちがいい。

三崎の家からはオレンジ色の光が漏れている。今頃、あのおばさんと三崎とおじさんで夕飯を摂っているころだろうか。それとも、八時過ぎだから、みんなでゆったり過ごしているのだろうか。夜遅くに来てしまった。そう思ったけど、仕方ない。狐がえりに誘うのはやめにした。それを告げるだけだから、いいだろう。

三崎の家のチャイム越しに、名前を告げると、三崎が表まで出てきた。つかかけをはいて、お風呂上りなのか、こざっぱりした短パンとTシャツを着ている。

「こんばんは。遅くにごめん」

「何？」

三崎は昼間の鮎ショックのせいかな、②心なし、穏やかな返事をした。三崎家の門に備え付けられた小さな外灯が、三崎の顔をぼんやりと照らしている。

「もう狐がえりのことはええで」

「は？」

僕が早速用件を告げると、三崎はいつもと同じように顔をしかめた。

「そやから、狐がえりのことはもう気にしんといて」

「どうして？」

「どうしてって、無理やり誘うのは悪いしな。三人でがんばることにするわ」

「そうじゃなくて、どうして、わざわざ夜にそんなことを言いに来るのよ。明日から誘いに来るのを止めれば、それでいいことではない？」

「そりやそうやけど、俺、毎日来てたやろ？ そやから、お前、いつ来るかいつ来るかって、気にしてたら悪いし。嫌なことからは少しでも早く解放されたほうがええやろ？ そやから早く言うとかなくて思って」

③ 「ふうん」

三崎は不思議そうな顔のままうなずいた。

「それと、ミヤコ、ほら、おかつぱの小さい女の子おったやろ？ あいつ、口悪いけど、言うたことは五分で忘れよるから、気にしんといてな」

「別に気になんてしてないわよ。そんなこといちいち言わなくていいのに」

「そつか。気にしてへんのやったら、ええんやけど。でも、お前友達おらんし、ミヤコは小学生やけど、一応女の子同士やし、一人でも仲良くなれるチャンス壊したらあかんかって思っ」

僕がそう言う、三崎はしばらく考えこんでから、

④ 「川居君って、やつぱり超失礼だね」

と言った。だけど、この間みたいに、怒って部屋には帰っていかずに、

「でも、まあ、それ以上に優しいから許すけど」

と、笑った。

「なんやねん、それ」

僕は思いがけず、優しいなんて言われて、真っ赤になった。

三崎はそれには答えず、玄関の前の石段に腰掛けると、「座つてよ」と僕にも指示をした。

短パンからすらりと伸びた三崎の足に、ちよつとだけどきどきして、僕は少し離れて隣に座った。

「私、引っ越しっ子なのよね」

三崎は僕が座つたのを確認すると、突然話しはじめた。

「なんやそれ？」

「今までに通算五回は引っ越しをしてるってこと」

「そういうの引っ越しっ子っていうのか。ほんま都会のやつらは、勝手に言葉生み出しよるなあ」

僕が言うと、三崎がけられら笑った。

「川居君の方言のほうが、よっぽど意味不明だけどね」

二〇一六年度

A

国語 (2)

[注意] 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

受験番号

⑤ 方言は伝統や。若者言葉とはわけが違う。僕はそう言いかけたけど、とりやめた。そんなこと言ったら、年寄りだと思われるしまう。

「私って今までに、小学校を二つ、中学校はなんと三つも渡り歩いてるのよ。すごくない？」

「そっか。だから、三崎って性格が悪いのか」

僕が納得すると、

「本当に失礼。⑥ A田舎の子って、言葉を選ぶって作業を知らないのね」

と、三崎が膨れた。

「言葉が悪いのは、お前だってやん。その田舎の子って言うの、ほんまやめたほうがええで。俺は寛大やで怒らんけど、他のやつが聞いたら、しばかれるで」

「川居君だって、⑥ B都会の人間はって、すぐ言うじやない」

「うそや。そんなこと言うた覚えはない」

「まあね。私も聞いたことないけど。でも、川居君が頭の中でそう思ってることぐらい、お見通しよ」

「ほんまに？」

僕はぎくつとした。三崎と話たび、だから都会のやつはって、しょっちゅう心の中で叫んでたから。

「うそ。ほんと単純だね。田舎っ子は」

三崎はまたけらけら笑った。三崎は笑うと少し声が高くなって、かわいい。いつもこんな風にしゃべればいいのに。僕はそう思った。

「とにかく、親の都合で、あちこち転々としなさいといけないなんて、ひどいでしょう？」

「まあなあ。⑦ Aそやけど、仕事やし、しゃあないやん」

「まあね。だけど、会社の命令ならまだしも、ここに来たのはお父さんやお母さんの意思だよ。勝手に脱サラされちゃって、本当いい迷惑だよ」

三崎はため息混じりに言った。三崎のおばさんも、三崎もこんなに楽しくなさそうだなって、三崎家がここに来たことは失敗だったのだろうか。

「⑦ Bそやけど、いろんな学校行けると思ったら、ちよつと楽しいやん」

僕らの学校は人数も少なく、転校どころかクラス替えもない。だから、今までと違う人間の中に入っていくのは、少し慣れる。「まさか、そんなことが楽しいわけないよ。転校生の位置って、難しいのよね。もう、固まっている人間関係の中に入っていくんだから。明るすぎても図々しがられるし、おとなしくすると、

ずっとそのまんま放ったらかされるし……。どうふるまうかが大切な。成功して、人気者になったこともあるけど、失敗して、いじめられることもあった」

⑧ 三崎は淡々としゃべった。

「ふうん。難しいもんなやな」

「しかも、今回はこんな田舎でしよう？ 今までの生活とは、まるで違うじゃない。だからいつにも増して気が重いんだよね」

そんなに違わへんと、言ってあげたかった。だけど、確かにその通りだ。三崎の暮らしと僕らの暮らしは違う。

「私ね、引越す前からいろいろ調べてたんだよ」

三崎がにっこり笑った。

「何をや」

「このこと。関西地方の人間は、標準語を話す人間を嫌ってるとか、ばかっというより、あほって言わなくちゃいけないこととか。味付けは薄めだとか、お好み焼きをおかずにご飯食べるとか。この地域に隣組制度があることも知ったし。田舎の人は鍵をかけないとか、田舎の子どもはそこら中の草でも食べるとか……」

「なんや、そのいい加減な情報は」

僕は続々と出てくる三崎のインチキ臭い知識に笑ってしまった。僕たちが都会を誤解しているように、三崎もこの地を本当には知らない。同じ日本の中でも、こんなにも誤差が生じるのだ。実際にそこで暮らさないと、その中に入っていないと、確かなことはわからない。

「笑いごとじゃないよ。真面目にインターネットで調べたんだから」

「噂では聞いたことあるけど、インターネットって、ほんまに恐ろしいもんなやなあ」

「だけどさあ、うまくやれるようにって調べたのに、逆に知ってしまったら、なんか余計にだめなんだよね。ここに関する知識を仕入れれば仕入れるほど、どうふるまうていいのかわからなくなっちゃう。関西弁しやべろうとしても、うそくさくなっちゃうし」

三崎もそう言って、笑った。

「そんな予備知識、無駄やって。三崎が標準語しやべってようが、ばかって言おうが、なんちゅうの、チョベリバとかわけわからん若者言葉しやべってても、お前がいいやつやったら、きつとうまくやっていけるって」

「そうかなあ」

「そうや。⑨ インターネットの情報なんて、当てにならない。それより、俺らと一緒に狐がえりしたほうが、よっぽど、このことがわかる」

二〇一六年度

A

国語 (3)

[注意] 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

受験番号

「そっか。そうだね」

三崎は素直にうなずいた。

「でもすごいね。川居君って、熱心。こんなに根気強く何かに誘われたの初めて」

「そうなん？」

「ほら、転校生って初めは珍しがられるけど、その分、すぐに飽きてみんな見向きもなくなるから」

「僕が熱心なのは、残念ながら狐がえりのためだ。伝統を守るためだ。三崎と友達になるうなんて気持ちには、まるでなかった。三崎の顔が嬉しそうで、少し胸が痛んだ。僕はなんとも言えず、ただあいまいに微笑んだ。」

「でも、今どき、東京でもチョペリバなんて言葉遣ってる人、いないよ」

三崎はそう笑って立ち上がった。

「ああ、ごめん。遅くなってもうたな」

「いいよ。おやすみ」

三崎はドアに手をかけると、

「⑩じゃあ、明日ね」

と手を振った。

「⑪ああ。明日？」

「不思議やね」

「鮎でもあかんかったのに」

「結局、女の子って押しに弱いんやって」

ミヤコは大人びたことを言った。

「ねえ、早く踊ってみせてよ」

三崎は公民館の真ん中にえらそうに座って言った。

「そしたら、まあ、見てくれ」

僕たち三人は踊りを始めた。みんなで円を作り、手を繋いでぐるぐる回る。その後は同時にしゃがんで、かけ声をかけて立ち上がり、前後ろに身体を揺らす。足はゆったりとしたステップを刻む。時々前後の揺れが左右になり、一回転になったりする。踊りと言ってもそれだけ。単純な繰り返しだ。だけど、タイミングが難しい。曲もなく、かけ声だけで踊るから息が合わない。

「何それ？」

一通り踊り終わった僕らに三崎が言った。

「何それって、踊りや」

「ふうん。なんかいまいち踊りに見えないのよね」

まだ練習は完全じゃないにしても、踊りを見た三崎の不服そう

な顔に、⑫僕はちよつとショックを受けた。

「そうだ！ リズムが足りないのよ。踊りだったら、もつとステップとか入れようよ」

三崎が言った。

「あかん。そんな伝統の冒瀆になる」

「冒瀆って大げさね。大丈夫。そんな大きく変えるわけじゃないから。ねえ、どう？ もうちよつと、ポップな踊りのほうがいいと思わない？」

「賛成！」

「私も格好いい踊りがしたい！」

三崎に振られ、サナオもミヤコも嬉しそうに同意した。

「なんやねんそれ。まあええわ。ほんだら、お前が思うようにしてみてくれ」

「任せて」

元ダンス部の三崎は機械に仕切り始めた。女の子同士は不思議なもので、もうミヤコは三崎になついている。

「足に動きがないのよ。だからすごく単調になるの。踊ってても、いまいちつまらないのはそのせいよ。もつと身体でリズムを刻まないで。ちゃちゃらんちゃんちゃん、ちゃちゃらんちゃんちゃん。これが基本リズムでしょう？ それを足で刻むの。そうねえ。最初の回転のとき、左足を後ろに下げて、二回足踏みをして……」

「難しいなあ」

「ほら、ぶつぶつ言つてないで」

子どもは柔軟性がある。サナオもミヤコも三崎の振り付けをすんなりとこなしていった。なのに、僕の足はなかなかステップを刻んでくれない。

「だから、もつと軽く足踏みするんだって」

「足踏みするんだって」

踊りをマスターしたサナオが、僕の足をべちべちと叩いた。

「そんなこと言われたって」

「⑬「ほら、狐がえり成功させるんでしょう？」」

みんなに教え込まれながら、僕は必死で練習を重ねた。

「伝統に新しい風。軽快なステップで盛り上がる狐がえり」

八月四日の朝刊の地方版には、僕たちの写真がでかかと載っていた。

(瀬尾まいこ『狐フェスティバル』)

注 冒瀆…神聖なものをけがすこと。

二〇一六年度

A

国語 (4)

〔注意〕 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

受験番号

問1 傍線①「夏は夜。去年国語で習った『枕草子』で、昔の女の人と言ったように、僕もそう思う」とあるが、「僕」は「夏は夜」がどうだと思ふのか、第一段落の内容から考え、適切な言葉を解答欄に合う形で五字以内で答えなさい。

問2 傍線②「心なし」とあるが、ここでの「心なし」の意味として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 少しでも イ 思いやりがなく ウ 気のせいカ エ 予想外に

問3 傍線③『ふうん』／三崎は不思議そうな顔のままうなずいた」とあるが、このときの「三崎」の気持ちを説明しなさい。

問4 傍線④「川居君って、やっぱり超失礼だね」とあるが、どのようなところが「失礼」なのか、説明しなさい。

問5 傍線⑤「方言は伝統や。若者言葉とはわけが違う」とあるが、「僕」は「方言」と「若者言葉」がどのように「違う」と考えているのか、説明しなさい。

問6 傍線⑥A「田舎の子って」、⑥B「都会の人間は」とあるが、この二つの言い方に共通する、人のとらえ方を説明しなさい。

問7 傍線⑦A「そやけど、仕事やし、しゃあないやん」、⑦B「そやけど、いろんな学校行けると思ったら、ちよつと楽しいやん」とあるが、これらの発言に共通する、「三崎」に対しての「僕」の気持ちを説明しなさい。

問8 傍線⑧「三崎は淡々としやべつた」とあるが、

(1) これはどのような話し方か、説明しなさい。

(2) この話し方から「三崎」のどのような気持ちがわかるか、説明しなさい。

問9 傍線⑨「インターネットの情報なんて、当てにならない。それより、俺らと一緒に狐がえりしたほうが、よっぽど、ここことがわかる」とあるが、「僕」がこのように考える理由をていねいに説明しなさい。

問10 傍線⑩「じゃあ、明日ね」とあるが、この発言は何を意味しているのか、説明しなさい。

問11 傍線⑪「ああ、明日？」とあるが、このときの「僕」の気持ちを説明しなさい。

問12 傍線⑫「僕はちよつとショックを受けた」とあるが、その理由を説明しなさい。

問13 傍線⑬「ほら、狐がえり成功させるんでしょう？」／みんなに教え込まれながら、僕は必死で練習を重ねた」とあるが、ここから「僕」と「三崎」の立場がどう変わったことがわかるか、ていねいに説明しなさい。

問14 この物語の作品名は『狐フェスティバル』であるが、作品名が『狐がえり』ではなく『狐フェスティバル』となっていることからどのようなことが考えられるか、説明しなさい。

□ 次の傍線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

① セイカ市場に行く。 ② ゴガン工事。 ③ 都市のリョクカ計画。 ④ 友人とのシンコウを深める。

⑤ キテキが聞こえる。 ⑥ トトウを組む。 ⑦ 雑誌をカンコウする。 ⑧ 土地をパイパイする。

⑨ シュシヤ選択。 ⑩ フタタび行く。 ⑪ ウチュウ飛行士になる。 ⑫ すばやくタイシヨする。

⑬ ツツみ紙。 ⑭ 車のリョウリン。 ⑮ 平和をハタジルシにする。 ⑯ 切羽つまる。

⑰ 寒さで身を縮める。 ⑱ 桜湯を飲む。 ⑲ 費用を折半する。 ⑳ 呼応する。

一

問 14	問 13	問 12	問 11	問 10	問 9	問 8	問 7	問 6	問 5	問 4	問 3	問 2	問 1
						(2)	(1)						夏は夜が、 ----- ----- ----- ----- ----- ----- と思う。

二

①	⑤	⑨	⑬	⑰
			み	める
②	⑥	⑩	⑭	⑱
		び		
③	⑦	⑪	⑮	⑲
④	⑧	⑫	⑯	⑳